

## 内村鑑三の「近代批判」と再臨運動

——社会から個人へ、そして再び社会へ——

岩野 祐介

はじめに

内村鑑三は日本のキリスト者として、生涯を通じ日本社会に對する働きかけを続けた人物である。ではその活動を通して彼が目指したことは何だったのであろうか。

内村が「日本的キリスト教」、「日本人による日本人のためのキリスト教」の確立を主張したのは確かである。そのため内村は日本的なキリスト者である、内村のキリスト教は日本的であると評価されることもある。しかし、彼が本当に目指していたことは「日本的」キリスト教の確立、キリスト教が日本に「土着」しキリスト教が「日本的」宗教となることだったのだろうか？キリスト者になるということは、受洗するかどうかではなくキリスト者としてどう生きるかという問題であるだろう。同様に内村の「日本的キリスト教」も手段であり、それにより「キリスト教的な日本」を現出させることが目的だったのではないかと考えられる。それは受洗者を増やしキリスト教を國教化させるといふようなことではなく、日本に住む個人一人一人がキリ

スト教的精神を身につけることにより、結果としてキリスト教的な社会が日本に現出するのを目指すということではなかったか。内村が活動の手法を一般的ジャーナリズムからキリスト教伝道へと変えたことを、思想上の退行と見做す向きもある。しかしキリスト教による根本的社会改良を彼が目指していたとすれば、それは退行と呼んで済まされることではないのではなからうか。

とはいえ内村は決して楽観的理想主義者などではなかった。個人の改良による社会全体の改良という事業が一朝一夕にして為されるようなものでないことは承知していたし、個人が変わるといふこと自体がきわめて困難であることも理解していた。しかしそれならば、何故彼は最期まで人間に希望を持ち社会に對する働きかけを続けることができたのだろうか。まずは内村が当時の日本社会をどのように捉えていたか、というところから議論を始めたい。

### 一 近代化の問題性

一九〇三年「日本國の大困難」において、内村は日本社会の問題性を以下のように表している。

日本國の大困難、其最大困難とは何でありますか、……それは日本人が基督教を採用せずして基督教的文明を採用した事であり、是れが我国今日の凡ての困難の根本で

あります、此の大なるアノマリー即ち違式がある故に我國今日の言ふべからざる種々雑多の困難が出て来るのであります。<sup>(3)</sup>

このように内村は自由、人権等概念的なことから政治体制、教育制度、科学、法律等実践的なものまで、全て西洋から移入されたものの背景にはキリスト教的精神があることを主張し、当時の体制・諸制度等は単に形態を移入したに過ぎぬ「靈魂のない骸」であると厳しく批判する。

勿論内村は日本の近代化・西欧化を全面否定したのではない。彼が例えば福澤諭吉のような近代化主義者と異なっていたのは、物質的近代化だけでなく、その精神的根柢たるキリスト教までも受容することを要求したことだった。

開国当初近代化・西欧化の精神としてキリスト教に注目した者は少なくなかったものの、その後は西欧化に対する反発もあり、結局キリスト教が社会の本流に受容されることはなかった。だが内村は物質としてのキリスト教文明を受容しながら精神としてのキリスト教を拒絶するのは「違式」であるとして、国粹主義の流れの中にあつても、キリスト教の受容を要求し続けたのである。

このように内村が指摘した物質と精神性のアンバランスは、実際様々な社会的矛盾や不正義の形で具体的に表面化していた。戦争、公害(足尾鋳毒事件)、汚職等である。しかし戦争のような大規模な問題から、汚職のような小規模な問題にまで、

内村はそれらに共通の問題要素を見出しつゝいた。それが欲望である。例えば内村は自らが日清戦争を支持したことについて猛省しているが、その理由として日清戦争が「義戦ではなく欲戦であつた」ことを挙げてゐる。内村の見た明治日本社会とは人間がその欲望のままに行動するような社会だったのである。

それゆえ内村は活動の手法を社会批判的なジャーナリストから、人間の肉面的改革を目指す独立伝道者へと変えた。さらに大正期に入ると個人主義の問題を扱うようになる。大正期になつて社会が安定し、一人一人が個人的問題を深化させるだけの余裕が生じたという要素もあるであろう。しかし内村は当初から自己中心主義の克服を課題の一つとしていた。そこで彼は当時の日本社会、内村が「近代人」と呼ぶ自己中心的な人々の社会における困難に直面したのである。そこで次章では、内村がどのように自己中心主義の問題を捉えているかについて考察したい。

## 二 内村における自己の問題

一九一〇年「罪とは何ぞや」において、内村は「罪」とは「人が神に対して犯したる叛逆」であり、「これが罪の罪であつて、凡ての罪の本である」と述べている。こう考える内村にとつて、近代的な人間中心主義もまた「罪」に他ならないものであつた。もちろん何かに反逆すること、独立的・個人的であること全

てが罪だというのではない。従うべき存在に従わないのは罪であり、従うべき存在とは神以外あり得ないと内村は言っているのである。そして服従すべき対象が神のみであるということは、人間が直接神の前に、何の介もなく立たされるということである。そのとき人間は単独の存在でしかあり得ない。信仰とは基本的に個人的なものである。

宗教は個人的である、全般的でない。宗教は「我等」でない、「我れ」である、複数でない、単数である、第一人称の単数である。人類又は人道の事でない、我れ自身の事である。……近代的基督教が無味にして無能なるは主として其れが全般的であつて又社交的であり、個人的でなく又一身的でないからである。

このように個人ということ重視した内村は、社会的文脈においても個人的あり方を重視していた。しかしそれは決して自己中心的あり方ということではない。

個人主義は個人を尊重する。自分を尊重すると同時に亦他人をも尊重する。人が自分を尊重せんことを要求するが如くに、自分も亦他人を尊重する。……真正の個人主義に、自他の差別はない。個人IIペルソンIIそれが尊いのである。

このように個人主義とは、個人を尊ぶ一方でその個人の尊さが全ての個人にあてはまるといふ点で普遍的なものにならなければならぬと内村は考えた。相互利他的な個人主義である。しかし実際の社会には利己的個人主義がはびこっている。内村

は、この利己的個人主義が「近代人」の特徴であると考え厳しく批判した。この「近代」という言葉は現代言われるような世界的近代、即ち宗教改革・ルネサンスを経て成立した市民社会的近代、という意味ではない。内村が「近代人」という言葉により示すのは彼と同時代の人間たちのことである。

近代人は極端なる個人主義者である。彼は先づ第一に自分の事を思ふ。其次に自分の関係者の事を思ふ。……其他の事を思はない。世界の事を思はない。国の事を思はない。神の事を思ふと云ふは実は自分と自分の愛する者との幸福を思ふに過ぎないのである。

……彼の中心は自己である、近代人は自己中心の人である、自己の發達、自己の修養、自己の実現と、自己、自己、自己、何事も自己である、……故に基督者ではない、自我を十字架に釘けて己れに死んだ者ではない、……。

自己の確立とは本来悪いものではない。ヨーロッパにおける近代化の過程では、封建的支配体制に対する個人・自己の確立が不可欠であつた。しかし内村は、その自己が結局は罪悪感のもとになり自らを苦しめることを体験していた。肥大化する自己は自らを押し潰すのである。確かに自己に目覚めなければ、自らに救済が必要であることにも気付かないかもしれない。ところが、自己による自己の救済は不可能なのであつた。それはさらなる罪悪感を呼び起こす思ひ上がりである。

解放も亦近代人絶叫の一である、彼らは社会的伝習より、

軍国的偏見より、宗教的拘束よりの解放を叫びつゝある、……旧き基督教も亦過去一千九百年間解放を唱え来つた、即ち罪よりの解放を唱え来つた、……然れども近代人は此事を解せず彼等は罪よりの解放を要求しない、……彼らは民主主義、社会主義、労働組合に由つてすべての拘束より自己を解放したりと信じつゝあるも猶ほ依然として前の奴隷である。

自分々々と云ふ其自分が悪いのである、夫が全ての苦悶の原因である、然りすべての罪の根本である、自分が清浄ならんと欲し、自分が義人たらんと欲し、自分が真理に徹底して完全なる人たらんと欲す、煩悶と苦痛と失望と落胆とは総て其処に在るのである、幸福は自分を完成するに非ず、自分に死するにある、……。

但し、このような内村の「近代人」批判には問題もある。当時の日本は制度面においてすら、個人が国家・社会の拘束から解放されていたとは言えない状態だったからである。にもかかわらず内村がキリスト教的でない個人の解放、自己の確立を自己中心と見做し批判したことは、大局観に欠けると言わざるを得ない。封建的支配から個人が解放され個人主義が確立し、それが相互利他的に発展していくと考えた方が妥当と思われる。

しかし内村はあくまでも、徹底的に神に頼り服従することを求めたのであった。この「服従」とは、主体的判断の放棄を意味するのではない。寧ろ本来の意味で「自己に目覚める」ため

に欠かせない要素なのである。一九二六年「エレミヤ伝研究」で内村は次のように述べている。

……エレミヤの信仰に由れば、彼の預言者たるは神の預定に由ると云ふ。……彼が預言者たるは自己の選びに由らず、自己の願に由らず、之は神が予め定め、彼の生れざる先より神の御意の中に存せるものであるとの信仰である。

そしてこのように「預定」、神の計画に従うことで「……我は偶然に目的なく此世に存在するに非ず、我が生れしは予め神の定めし大なる御計劃の結果にして、従つて我が生涯は或る明確なる目的を果たすべき者なるを覚る」ことになると内村は説く。さらに「……我は真の個人であり我に代りて我が目的を果たすべき者は他にない。……我は是非とも神に定められし其の目的を遂げねばならない。……然かも我のみではない。何人もかゝる使命をもつて生るゝのである」と、人間は全て一人一人神から使命を与えられたかけがえない存在であることを述べるのである。「個人」ペルソンそれが尊いのである」という言葉の根柢はここにある。これは言わば信仰に基づいた自己の確立なのであると言つてもよいであろう。

そしてこのように「我が目的」を見出した「個人」はもはや無力な人間ではないであろう。その目的を果たすべく、力強く歩み始めるのではあるまいか。それはエレミヤが、そして内村自身が決して棄てない伝道活動を続けられた秘密でもあるのだから。

### 三 内村による応報論

しかし、内村の求めるような相互利他的関係は、お互いが誠実でなければ成立しないであろう。自己中心的「近代人」の間で「神に与えられた目的を果すべく」行動しようとするれば、どのような事態が生ずるであろうか。誠実が常に誠実によつて報いられるとは限らず、寧ろ他者の善行を利己的に利用するような事態が生ずるのではないか。

勿論内村自身もそういった不条理を数多く体験している。そして、神の言葉がつづられた真実の書であるはずの聖書の中にも、それら不条理は存在するのである。それらを内村はどのように解釈しているだろうか。

その題材としてここでは内村が「コヘレトの言葉」について論じた「伝道の書 研究と解説」を取り上げる。「コヘレトの言葉」に着目するのはその中に「この地上には空しいことが起こる。善人でありながら悪人の業の報いを受ける者があり、悪人でありながら善人の業の報いを受ける者がある」と、応報論の破綻が述べられているからである。

内村によれば、コヘレト書のテーマは「善、人の至上善とは何ぞ」ということである。しかし内村は「此大問題に対して、彼（コヘレト）を指す、筆者註」は消極的解答を与ふるに成功して、積極的解答を与ふるに甚だ貧弱であったのである」と解釈する。ではその積極的な答えはどこにあるのか。「至上善は聖書

の他の文書から学べばよい」と内村は主張するのである。

以賽亞書に於て、耶利米巫記に於て、四福音書に於て、羅馬書に於て、新約聖書全体に於て最も明白に此事（至上善とは何か、筆者註）を示して居る。

このように内村は「コヘレトの言葉」は新約聖書に補われはじめて意味のあるものとなる、と考えた。「本當に全ては空しいのか？」と読者に思わせてイエスの言葉へと導くものだ、というのである。人生の至上善とはイエス・キリストによる神への信仰であり、それが幸福の源、希望なのである。「コヘレトの言葉」三章には、人間の為すことには全て為すべき「時」があり、その「時」に合わなければ何も成功しない、との言葉がある。しかし「時」を知らず失敗することを恐れていては結局何も為せないであろう。「自分は必ず時を得て成功できる」と確信し敢えて何かを為そうとする力・希望は、イエスを通し、神を通して得られるのだ、と内村は主張する。

その一方で、善行を為すことに関しては時を待つ必要などない、と内村は続ける。「伝道書の著者は時を捉ぶの必要を説くと同時に善事常行の必要を唱ふることを怠らなかつた」。そのような積極性は一体どこから生ずるのであるうか。

……コヘレトは神の選民の一人として厭世的に人生を解釈し了らなかつた、彼は預言者の精神を受けて歓喜的に人生を觀た……。

「神の選民」となるとその妥当性に若干問題があるように思わ

れるが、同時に「預言者の精神」と言うからには、単にユダヤの民族性の枠内にとどまるものではないであろう。その内容は以下のようなものだ。

人生の至上善は智慧に非ず、快樂に非ず、功績に非ず、惜むことなく施すに在りと彼は覺つた、汝のパンを水の上に投げよと彼は最後に叫んだ、……汝のパンを水の上に投げよ、無効と知りつゝ愛を行へ、人に善を為して其結果を望む勿れ、物を施して感謝をさへ望む勿れ、たゞ愛せよ、たゞ施せよ、たゞ善なれ、是れ人生の至上善なり、最大幸福は茲に在りとコーヘレスは言ふたのである。

ここに応報論に対する内村の一つの解答がある。結果を求めずただ愛せ、それが至上善・最大幸福だ、と言うのである。相互に善行を施し合わなくとも、ただ「パンを水に投げるように」善をなすだけでそれが幸福だ、というのである。

しかし何故そのように無益に思えようとも、結果が得られなくとも幸福であると言えるのであろうか。最後には神の裁きがあるからである、と内村は答える。我々にそれがいつかはわからないが、究極的な裁きがあるのである、と。

「義人の悪人の受くべき報を受くるあり、又悪人の義人の受くべき報を受くるあり」とは此世の事であつて神の審判の未だ行はれざる時の状態である、此状態を見て何人も「是も亦空なり」と歎せざるを得ないのである（八章十四節）、然し乍ら神の審判を受けて此矛盾は全然取除かるるのであ

る、我罪も顕るれば我義も顕るゝのである、斯くて善を為す事の無益ならざる事が明白に示さるゝのである、……

応報論的、相互利他的なあり方はもちろん美しい。しかし人間の本性は旧約聖書が記された時代から変わらなず、利己と損得勘定に走りがちである。そのような人間の状況に決定的解答を与えるとしたら、それは神の直接的干渉しかない。内村は、「神のみぞ知る」という手詰まりな状況を、半ば強引に逆転しポジティブな意味付けをしたのである。神のみぞ知るということは、いつか神が何とかしてくれるということでもある、だから安心して善をなせ、と。

しかし「いつか報われる」と言うのであれば、その「いつか」はいつなのかという疑念が生じてくる。内村はそれをキリスト再臨の時であると考えたようである。そこで次章では彼の再臨運動について検討してみたい。

#### 四 内村鑑三の再臨運動

再臨運動期とその前後の内村に対しては賛否両論がある。イエスの再臨という主張が一般的には非科学的なものだからである。また内村は確かに再臨運動においてそれまでとは違う面を見せてもいる。しかし彼は札幌での「一度目」米國での「二度目」と並べ、再臨信仰の確立を「三度目の回心」と称している。「回心」と言うからには、それ以前との断絶があるのであろう。

しかし一度目・二度目と並べて「三度目」と言うからには、それ以前との連続性もまたあるはずである。そのように考えれば、再臨運動とは内村が宗教的に転向し、後に考えを改め従来立場に戻った、というような特殊な事態ではなく、彼の信仰が連続的に発展する線上に置くことが可能なものではないだろうか。実際、再臨運動期以降内村が社会改良への熱意を捨ててしまったわけではない。

……キリスト再び現はれ給ふ時に此世は化して神の国と成るのであるとの信仰は一見して凡の改革事業を妨ぐる教義なるが如くに思はれる、然し乍ら事実如何と問ふに其正反対が事実である、世を革むる精神にして神子再臨の希望に勝りて有力なる者はないのである、……道徳を超越せる信仰に依りてのみ高き道徳を實行することが出来る……。

#### 四―一 内村の再臨思想

再臨思想自体はキリスト教の成立当時から存在したものである。当然内村も知識としては再臨思想を知っていた。また友人ペルを通し、米国での再臨運動の動向についても知っていた。それゆえ再臨思想と再臨運動は区別しておかねばならないし、内村もこの時期に突然再臨思想に目覚めたわけではない。寧ろ再臨ということを再発見し再臨運動へと至ったのである。その主な理由として、二つを挙げる事が可能である。恐らく最大の理由は第一次世界大戦である。そしてもう一つ見落とせないのが愛娘の死である。

内村は米国学時時に社会進化論を学んでおり、それは「彼の歴史観の基盤」となっていた。日清戦争の際内村が義戦論を唱えたのも、それが結果としてアジアの進歩発展に繋がると考えたからである。しかし結果は物質的進歩発展がせいぜいで、内村の理想とは程遠い義戦ならぬ「欲戦」であった。内村は戦後猛省し、非戦論者となる。その後も世界が進歩発展し平和へと向かう様子はなく、内村の歴史観は徐々に変わりはじめていた。そこへ来て未曾有の大戦争、第一次世界大戦の勃発である。彼は開戦当初からこの戦争を終末的破壊と重ねて捉えていた。

……戦争は廃まない乎と云ふに必ず廃みます。主イエスが、キリストが栄光を以て天より頭はれ給ふ時に廃みます、……戦争はキリスト再臨の確かなる徴候であります、……。

一方で内村は彼をキリスト教に導いた国であり中立を保っていた米国による仲裁を期待もしていたが、米国の参戦により彼の期待は裏切られる。内村は改めて人間による平和追求の限界を強く認識し、真の平和がもたらされることがあるとすれば、それは神によるはたらき、キリストの再臨よりはじまる最後の審判、神の国の到来しかありえない、と考えるに至ったのである。

内村を再臨運動へと向かわせたもう一つの要素は愛娘ルツ子の死である。内村ルツ子は一九二二年一月十二日、病の為に永眠した。これにより内村は死と正面から立ち向かわざるを得なくなった。

内村の熱烈な祈りにもかかわらず、ルツ子は死んでしまった。果たして彼の祈りは神に聴き届けられなかったのだろうか。ここにおいて内村は以下のように考えた。

……我等の祈求が聴かれぬのではない、聴かるゝまでに時が要るのである、……父は其定め給ひし最も善き時に於て我等の祈求を悉く聴き給ふのである。

人間の時間は有限であるが、神は時間を超えている。神からの答えがいつ得られるのかということは、人間には計り知れない。それ故人間は待つことしかできない。しかしイエスの十字架という出来事を通して人間は神から救済の約束を得ている。無駄な待ちぼうけにはならないのである。

……永遠に生き給ふ神は時を定めて恩恵を其子に下し給ふ、或る恩恵は直に下る、或る恩恵は年を経て下る、又或る恩恵は来世に至る、我等の祈求が聴かれぬのではない、聴かるゝまでに時が要るのである、信者の祈求はすべて聴かるゝのである……。

有限性を意識する限りでは、人間は悲観的にならざるを得ない。しかし内村は救済の約束から徹底的な希望を得ることができた。たとえ自らが生きている間に報われなくとも、いつか必ず報われる、という確信を得るに至ったのである。さらに、聖書に書かれているごとくキリスト者にとっては死も終わりではなく、神の救済による永生があると内村は考えたのであった。

……是れ生命の一の状態より他の状態に移さるゝことな

り、……彼に信し奉りて死はまことに睡眠なり、復活の曙にすべて彼を愛する者と共に覚めて起きんまでの睡眠なり、讚美すべきかな。馬太伝九章二十四節。

永遠の命を得るとは、死なないということではなく、死から蘇るということである。復活により死と永生との間が繋がるのである。内村はもともと、人はキリスト者となることで新しい人となるという意味で既に復活している、と捉えていた。そしてここに至り、その復活に新たな意味が加わることになった。終末的な復活、復活の完成である。

パウロの所謂霊の質とは信者の復活体の元始であつて其核心とも称すべき者である、信者は之を受けて既に復活体の元質を受けたのである、……復活体は死後に於て奇跡的に上より被せらるゝ者ではない、その元質は信者が信仰状態に入りし其時に既に与へられし者であつて、死後に其完成に達する者である、斯くして信者の復活は半ば未来の希望に属し、半ば既成の事実である、……彼は今既に復活されつゝある者である、而して死後に於ける復活の完成を俟つ者である。

復活の完成とは、キリスト再臨よりはじまる万物の復興の中で起こる聖徒の復活である。再臨運動当時の講演や文章で内村自身がルツ子の死について言及したことはないが、これが彼を再臨運動へと向かわせた要因の一つであることは、明らかであろう。

「二度目の回心」において、内村は人間が人間を救済することはできない、と悟った。内村のキリスト教は当初から人間の限界、無力さを強く意識したものであったのである。そして、第一次世界大戦とルツ子の死という二つの要素により、人間の限界性を改めて徹底的に、かつ体験的に考え感じたことから、内村は聖書を捉え直すようになった。それは再臨思想を確信的なものとさせ、再臨の時は近いというそれまでにない切迫感を与えた。そこから再臨運動が始まったのである。

#### 四―二 内村の再臨運動

内村の再臨運動には以下のような特徴がある。まず、聖書研究者である内村は再臨運動においても聖書から離れることはなく、あくまでも聖書を土台として再臨を主張した。「聖書の預言的研究」で内村は以下のように述べている。

聖書は道徳の書ではない、預言の書である、……聖書を誤解する主なる原因は其預言を離れて其道徳を解せんとする事に在る……。

預言は歴史観である、……而して聖書に特別の歴史観があるのである、……聖書は歴史である、……過去現在未来を通過して一貫する宇宙人類に關する神の聖謨の実現に就て語る歴史である、……信仰の眼を以てするにあらざれば解する能はざる歴史である、故に其正解に神の指導を要するのである、而して此指導の任に当りし者が神の預言者である。

この主張だけを読むならば、イエスを社会的理想主義者と見るような啓蒙主義的イエス観に反対し、イエスは終末論者であるとしたシュヴァイツァー等の主張に近いようにも思える。しかし内村の主張はもっと素朴なものである。例えば、山上の垂訓が実質的に実現不可能な教えと思われのは、為されるべき背景が異なるからだ、というのである。

也

とある(馬太伝五章三)、其前半は道徳であつて其後半は預言である、天国獲得を基礎として説かれたる教訓である、若し天国にして有らざらん乎、此教訓は其権力を失ふのである、……。

ここで内村はこの世における理想社会等ではなく、文字通りの天国を考えている。そしてそれはキリスト再臨よりはじまる一連の終末的出来事の中でもたらされる神の國、天国であると主張しているのである。また「聖書の証明」では新約聖書よりマタイ三・七からヨハネ黙示録二二・二〇まで百箇所以上の具体的箇所を再臨の根拠として引き、「再臨は必ずある」と主張している。このように内村の再臨運動は「聖書をそのままに読んだ」ところから生まれたと言ふことができるのである。

しかし内村が再臨運動期に聖書の無謬を述べているといつても、それは彼が聖書学的視点を放棄したということではない。内村にとつては、無謬ということと逐語靈感説的に聖書に書い

てある事全てが文字通りに正しいということとは、内容として異なるのであった。

内村の聖書の読み方には独特の二重性がある。彼には聖書はそのまま読めば解る、という主張と、人生経験を経なければ決して解らない、という主張とがある。科学的・聖書学的知識を重んじつつ、その一方で聖書を読む上で知識は結局役に立たない、と言ったりもする。その両方ともが彼にとつては真実なのである。中心はあくまでも信仰であるが、しかし知識は信仰をより確かなものにするために不可欠な要素だったのである。例えば一九〇〇年『宗教座談』第三回「聖書の事」の中で内村は聖書について「神の事を人が伝へた書であります、人が伝へたのでありますから其中に多少の欠点が無いとは申されませんが、然し神の事を伝へたのですから非常に貴い書で御座います」と述べている。再臨運動期には、「人が伝へた」と「神の事を伝へた」ことのうち、後者に大きく力点が置かれたということであり、内村の読み方が全く変化してしまつたわけではない。それ故、欧米の再臨待望運動でなされたような「特定の日にキリストが再臨する」という予想について内村は完全に否定している。「余がキリストの再臨に就て信ぜざる事共」では、次のように説明している。

……余はキリストが何年何月何日と時日を定めて再臨し給ふとは信じない、……神は再臨の時日を秘し給ふ、而して神の秘し給ふものを人が探らんと欲してはならない、我

等は神の定め給ひし時に必ず再臨があると信ずる、其事が今年あらうが明年あらうが、十年後にあらうが、百年後にあらうが、或ひは更らに遠く千万年の後にあらうが我等の関する所でない、……待つは子たる者の取るべき態度であつて彼に取り大なる特権、大いなる幸福である……。

このように、内村は再臨の時は近い、という意識を強く持つてはいたが、再臨が「いつ」あると言つてはいない。彼が再臨に関して主張した内容は、殆ど「再臨はある」ということだけである。

神の計画については神のみが知る。それは人間に計り知れることではなく、人間はただ待つことができるのみである。それゆえ内村は「待つこと」の喜びを主張する。そして再臨の後もたらされるであろう万物の復興についての希望を語る。

……聖書は神が人類を救ひ給ふと同時に時たらば万物をも改造し給ふ事を教ふるのである。此の呪はれたる地球、此の山川草木禽獸、此の宇宙万物が遂に贖はれて聖者の住むに適當なるものとせらるべき事を予言するのである……。

このように再臨において、自然を含む万物の再興へと眼を向けたこともまた内村の再臨運動の特徴である。彼は自然科学者であり、自然に神の言葉を見出すタイプの信仰者であつた。

内村にとつて終末とは単なる世界の終わりではなく、その後の再興へとつながる希望に満ちたものであつた。再臨運動は終

末的というよりも来世的だったのである。故に再臨運動はまた希望運動とも言えるようなものである。それは全てを神に任せて大丈夫だという確信に基づくものであった。内村の真意は、本当に人間が社会を変革させようとする意志・力を持ち得るためには、再臨を信じ徹底的な希望を持たねばならない、ということであつたのである。

第一次世界大戦という未曾有の大破壊に直面した内村は、社会に対して希望を示さねばならぬと感じたのである。それが果たすべき預言者の使命であると彼は考えたのではないか。そして第一次世界大戦というどうしようもなく絶望的な出来事に立ち向かえるだけの強烈な希望、それはキリストの再臨をおいて他にはなかった。内村が信仰により娘の死を乗り越えたように、信仰により破滅的状况も乗り越えられると広く社会に対して訴えねばならないと感じたのであるだろう。

まとめに代えて

内村は社会改良の方法として、社会全体ではなくその構成員たる個人を改良する方法を選んだ。大変な遠回りではありながらも、それが唯一確実に社会を変える方法であると考えたからであつた。人間の本性自体は旧約聖書時代から変わっていないように見えるが、だからといってそれは一人一人の人間が全く変われないということではない。コヘレトが「水の上にパンを

投げよ」との答えを得たように、人間は不条理な状況の中にあつてさえ希望を抱きそれに立ち向かうことができる。自らの無力さゆえに全てを投げ出したくなることもあるかもしれないが、絶望しなくともよい。いつか必ず神が答えてくれるという約束を得ているからだ。

善行への報いは終末的にしか得られないと考えた内村自身、一九二五年『聖書之研究』第三百号感謝紀念会において、次のように語っている。

人は私を評して主義の人と云ひますが、私自身はそれで無い事を知つて居ます。主義に依て、我慢して道は成る者ではありません。成功の秘訣は欲びに在ります。深い強い欲びの在る所に文章は自ら成り、途は自から開けます……。そして如何なる欲びか福音の欲びに較ぶべけんやであります。……是は人類の幸福の極であります。此事が判つて何人も静然して居ることは出来ないであります。……人は献身犠牲であるとか又は意志鞏固であるとか云ひますけれども、実は犠牲でも意志でもないのでありまして全身に滲渉する宇宙的欲喜であります。此欲喜を宣べ伝ふるが『聖書之研究』の事業であつたのでありまして、是れありしが故に内外の凡ての困難を打越える事が出来たのであります。

なるほど、行為に対する応報は終末を待たねばならないのかもしれない。しかし内村は為すことそれ自体、希望を伝えるこ

とそれ自体に希望を見出していたのであった。それこそが預言者たちの精神から内村が感得した「秘訣」であつたように思われるのである。

## 註

引用文献は特に記されていない限り内村鑑三によるもの。内村の文章は『内村鑑三全集』岩波書店、一九八〇～八四年による。

- (1) 武田清子著『土着と背教』新教出版社、一九六七年において、内村は「対決型」と「接木型」の性質を併せ持つ人物とされている。武田は「接木型」を、「日本の精神的伝統に内在する諸価値の中から積極的可能性を潜在させた萌芽と考えられる要素を選択し、そこにキリスト教の真理を血肉しようとする試み」として一定の評価を与えている。
- (2) 例えば家永三郎、太田雄三等。
- (3) 「日本国の大困難」一九〇三年、『全集』一一、一四七頁。
- (4) 「宗教は個人的である」一九三二年、『全集』二七、七〇八頁。
- (5) 「個人主義と自己主義」一九二四年、『全集』二八、一六五頁。
- (6) 「個人主義」一九二三年、『全集』二七、四五一頁。
- (7) 「近代人」一九一四年、『全集』二〇、二三九頁。

- (8) 「Emanicipation 解放」一九二〇年、『全集』二五、二七七頁。

- (9) 「幸福の途」一九二二年、『全集』二六、四六五頁。

- (10) その意味では、内村の本当の敵は個人主義一般の確立を阻害する君主制国家権力等であつたはずである。それは内村自身が不敬事件を通し経験したことではなかつたか。

- 内村による近代批判の問題性については、主として近藤勝彦『デモクラシーの神学思想 自由の伝統とプロテスタントイズム』教文館、二〇〇〇年、第三部第二章、及び、澁谷浩『近代思想史における内村鑑三』新地書房、一九八八年、第六章、第七章を参考とした。

- (11) 「エレミヤ伝研究」一九二六年、『全集』二九、三六四～三六五頁。

- (12) 前掲書、三六五頁。

- (13) 前掲。

- (14) このように内村は自己の確立ということを否定しているわけではない。しかしこの自己とは厳しい反省を与えられるべきものであり、最終的には神への信仰の中で放棄されるべきものであつた。内村は自己の確立とその先までを見据えて自己主義を批判しているのである。

- (15) 「伝道の書 研究と解釈」一九一五～一九一六年、『全集』二二、一八～二五頁。

- (16) コヘレトの言葉八・一四。新共同訳。

- (17) 前掲「伝道の書 研究と解説」一九頁。
- (18) 前掲書、二〇頁。
- (19) 前掲書、二〇頁。
- (20) 前掲「伝道の書 研究と解説」、二七頁。
- (21) 前掲書、三四頁。
- (22) 前掲書、四五頁。
- (23) 前掲書、四三頁。
- (24) 前掲書、四四頁。
- (25) 日本社会、文化に対する貢献・影響力という視点のみから内村を評価するならば、その頂点が日清戦争以後の数年間にあり、伝道に従事するようになってからは「社会から後退した」と見做すのも一面妥当ではある。家永三郎「近代精神とその限界」『家永三郎集 第四卷』岩波書店、一九九八年、一七四〜一七六頁参照。
- (26) 「信仰と実行」一九一八年、『全集』二四、三二九頁。
- (27) 鈴木俊郎「内村鑑三伝」岩波書店、一九八六年、六七〇頁。
- (28) 例えば一九〇八年「世界の平和は如何にして来る乎」「世は果して進歩しつゝある乎」等の文章に、既に再臨思想が見られる。
- (29) 「戦争と伝道」一九一四年、『全集』二一、一一〇頁。
- (30) 「時の問題 疑問の解決」一九一三年、『全集』一九、三八三頁。

内村鑑三の「近代批判」と再臨運動(岩野)

- (31) 前掲、三八四頁。
- (32) 「贊美すべき死」一九一二年、『全集』一九、四頁。
- (33) 「如何にして復活する乎」一九一五年、『全集』二一、三八〇〜三八一頁。
- (34) 「聖書の預言的研究」一九一八年、『全集』二四、九頁。
- (35) 前掲。
- (36) 前掲、一〇頁。
- (37) 「聖書の証明」一九一八年、『全集』二四、一六三〜一六七頁。
- (38) 「宗教座談 第三回 聖書の事」一九〇〇年、『全集』八、一三七頁。
- (39) 「余がキリストの再臨に就て信ぜざる事共」一九一八年、『全集』二四、四七〜四八頁。
- (40) 「天然的現象として見たる基督の再来」一九一八年、『全集』二四、二二二頁。
- (41) 「頌栄の辞」一九二五年、『全集』二九、二九二〜二九三頁。